

2006. 6月号

アスリートのための キャリア・トランジション勉強会

Newsletter No. 14

2006年 4月20日

第14回

アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

【目次】

1. アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会趣旨説明	1
2. 「トランジションを支えてきた源泉」ゲスト：小林 至（こばやし いたる）氏	2
3. 第14回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会	
アンケート集計結果	14
2006年4月20日 勉強会参加者一覧	17
4. 次回勉強会スケジュール	17

1. 「アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会」趣旨説明

■主宰より

➤ この勉強会は

1. 「キャリア・トランジション」、つまりセカンドキャリアではなく、再就職支援でもなく、「キャリア・トランジション」ということはどういうことなのか。
2. 「キャリア・トランジション」ということをセカンドキャリアプロジェクトに入れた場合、どのような支援を必要とするか。
3. そもそも選手にとり「キャリア・トランジション」とはどういうことであるか。
ということ、参加者と一緒に考えていくことを目的としている。

➤ ゲストについて

- ① 元トップアスリート
- ② 研究者、ビジネスマン

を迎え、それぞれの側面から転換期(トランジション)について情報提供、ご意見をいただく。

キャリア・トランジションという言葉そのものがスポーツだけに限らない、ニート、フリーター問題などに対してもまったくもって当てはまる。やりがい感、生きがい感というようなことに対しても当てはまる内容であるという共通テーマと位置づけている。

➤ 民間におけるアスリート対象のキャリアサポートの動き

○株式会社インテリジェンス(就職支援会社)において4月18日に正式にサービスインしたACTプログラム(Athlete Career Transition Program)について。パフォーマンスエンハンスメント理論にのっとったプログラムをインテリジェンスと田中ウルヴェ京により共同開発。

○国際水泳連盟(FINA)会議(上海)において田中ウルヴェ京がおこなったキャリア・トランジション・プログラムを、正式にFINAが公認。

2. 小林至氏を迎えて

【現在の仕事】

江戸川大学の教員として今年で5年目。主にスポーツビジネス関係の科目を担当、統計も教えている。去年まで6科目。今年からホークスの業務が忙しくなり、大学の厚意で3教科にしてもらっている。ホークスは立場上経営者で、自分で走り回るといよりも人を使って、人に走ってもらうという仕事。

【自己責任の強さと現在の仕事に関する戸惑い】

大学も高校も含めて思い起こすと、だいたい自分で決めて自分で走って、あと結果も責任も全部自分で取るという、今思うと、非常に分かりやすい人生を歩んできた。全部自分で決められる。失敗しようが何しようが結果は自分で、というのは、非常に楽なんだなあ、いま、組織の中に入って実感している。組織の中にいると自分でやって自分で動いてというわけにはなかなかいかない。部下がいて、上がいて、横がいてというパターン。

【野球ではエリートじゃなかった】

神奈川県立多摩高校は全国区の学校じゃなくて、何よりも野球は弱い。だいたい(県大会)で3回戦にいけない方。その中で僕はレギュラーじゃなかった。県立高校のレギュラーじゃないということは、あんまり野球はうまくない。それでも大学で野球をやりたいかった。高校のときにやっぱりレギュラーになれなくて悔しかったのだと思う。野球をやって見返してやるんだという思いと、一方で現実も結構分かっている、例えば6大学のほかの5大学で試合に出られるとも思っていない。現役(高校3年)のときに大阪大学を受けた。なぜかという、これも野球で、高3年時の春に、大阪大学が大学選手権にたまたま出てきた。それで大阪大学にしようと考えたが、軽く落ち、浪人。浪人すると何となく最初の目標を高く持とうとなり、目標を東大に変更、とにかく「目指せ神宮」という暗示を掛けたようなところもあった。1年間本当によく勉強した。日本で一番勉強したと思う。

【陰しかったプロへの道のり】

プロ野球にははっきり言って自分が入れるとはまったく思っていなかった。思っていなかったが、進路調査でプロ志望と書いた。なぜ書いたかという、まず、野球を続けようとは思っていた。それはおそらく社会人野球ということになるのだろうが、やっぱり目標は高くということで、その道の頂点、プロ野球と書いた。いずれにせよ、新聞記者とか、テレビの方に聞かれるたびに、プロって答えた。誰も相手にしなかった。ところが言うてみるもので、新聞記者とかマスコミの間で、ちょっとした話題になっていたらしく「おい、知ってる？東大の小林っていうピッチャーがプロって言っているよ」、「ああ、いるんだよ、東大にはそういうばかなやつが」、「まだ1勝もしていないのに何か偉そうなことを言っているよ」と。雑談の種になっていたのが金田さんの耳に届いて、テストを受けに来なさいと言っただけだ。言うてみるものだ。テストの日もまた運がよくて、11月の半ば頃の月火。月曜日というのはスポーツイベントがなく翌日のスポーツ紙はこれが全紙1面だった。2日目のテストのときはテレビ局も全局来ていた。翌日から電話も本当に鳴りやまなくて、一躍、時の人、という感じだった。このように、縁と運とに恵まれ、プロに入れた。

【野球をやっていない時期もあった】

高校時代、当時の時代背景もあったと思うが、ものすごく厳しかった。朝のグラウンド整備が6時半から7時ぐらいに始まって、始業ベルまで。それから授業中はボールと、先輩のグローブ磨きにスパイク磨き。昼は先輩

の練習の手伝い。昼休みが終わって5時間目、6時間目が終わって練習に行つて。終わった後も、またボール磨きやらなんやらで遅くなり、しかも、先輩と同じ電車に乗ってはいけなかった。先輩が乗ってきたら降りる。結局、帰れるのは9時とか10時。毎日、やめることしか考えていなかった。実際、よくサボりもした。「お前、よく休むから診断書を持ってこい」っていわれるほど(笑)。今思えばいい経験だった。また、こうした体育会生活を長くやったことで、礼儀など良い習慣も身に着いたと思う。今でも僕は時間にうるさい。結構3分とか5分とか平気で会議に遅れてくるのがいるが、僕はあまりそういうのはない。一方、体育会の問題は、どうしても人を常に年齢で切る。自分と同じか下か上かかっていうので、人間の序列をそのまま年齢で区切る。

それにしても、野球というスポーツはビジネスの観点で考えると高飛車だと思う。普通は、スポーツでもゲームでも食べ物でも、好きになってもらいたくて、あの手、この手で勧誘して、その後も逃げないようにあらゆる努力をする。ところが、野球は、少年野球から大人まで、まずは排除する方向。たとえば、当時の野球名門校は、部員が100人とか200人の世界。三年間、一度もバッティング練習をしたことないなどというバカげたことが現実にならなかつた。今、そういうことをしたら「じゃあ、自分はほかのスポーツをやる」となる。リトルリーグや少年野球では、合併なんていうケースはたくさん出てきている中、僕のときのようない理不尽なことは少ないと思う。時代だと思う。

【プロとして体験したギャップと生き残るために考えたこと】

「何のためにこれをやるのか」といったときに、体験論が先行していることに対してギャップを感じたこと。あとはもちろん自分と彼らの能力の違いのギャップというのは大きかった。六大学なので、プロに近い選手、実際、プロに行った選手と対戦は少なからずあったが、彼らの運動能力をフルに見ることはなかつた。というのも、自分はピッチャー。相手にする彼らはバッター。非常に制約されたシチュエーションだ。実際に練習を同じフィールドでやる彼らの能力の違いってというのは、これは大きかった。例えば僕はゲッツーが取れなかつた。ファーストが取って、ショートに投げると、ピッチャーはベースカバーに入る。ショートから来る球が、おそらく時速140km。東大のときは僕だって130キロで投げた(笑)。野手でそんな速い球で来るわけがない。ポンと取れていたのが、速くて取れない。彼らだって高校のときはエースでやっぱりピッチャーだったから、ものすごいスピンのかかったのがビューンと浮いてくる。そういう能力の違いはすごく感じた。とはいえ、そういう能力については想定範囲内だった。小・中・高・大と、そういう人たちをテレビやスタンドで見っていたので全然違うというのは分かっていた。ピッチャーというのは面白くて工夫の余地がある。要するにバッターを打ち取ればいい。(マウンドからベースまで)18.4メートル届いて、その届いたボールがバットの芯を外せばいいというふうに割り切っていた。結局通用しなかつたから、あまり説得力はないが。

【プロ野球選手と社会人の違い】

プロ野球選手って本当に幸せなのだということを、入る前は思っていて、離れてみると実感として分かるけれど、不思議なことに、中にいると意外と気付かない。

野球をやって金をもらえる。いい汗をかいて。最高だと思う。普通の社会人は大変だ。一途に打ち込む、なんてことはありえず、いろいろなことを考え、あらゆるプロジェクトをやる、それも同時進行で。人やいろいろなことにも気を使わなければいけない。その点、スポーツ選手はいい。極論すれば、どんな悪人だろうが、野球であれば、野球さえうまくやればいい。猛烈に幸せな環境で、しかも当時、独り者なら生きていくには十分すぎる給料をもらっていた。23歳ぐらいの年齢で。ましてや契約金ももらってという幸せな環境にあるということ、3年間ファームにずっといて忘れてしまった。

【燃えていた当時と後悔】

今人生で一番後悔していることは、最初、金田さん(当時監督)に取ってもらったとき、話題性だけじゃなくてお前の目を見て取ったって言われたくらい僕は燃えていた。話題性もあったが、「やる気」に圧倒されてロッチェが思わず取ったともいえる。要するに、押しかけ入団ですが、相手に「うん」と思わせるような雰囲気があるくらい燃えていた。それが、3年間その状態をずっと保つのは難しく、ひたむきにとにかくその与えられた環境に対する喜びを、幸せをかみしめながらすべてをささげるような、そういうのだったら良かったと思うが、だんだん擦れてきた。ファームにいと「ファーム擦れ」なんていう言葉がある。みんなエースで4番、高校でスーパースター、少なくともアマチュアのときにスーパースター、それが試合に出られない。ばかにされる。同じ(実力)くらいだと思っていたのが、例えば5,000万円も6,000万円ももらっているような、そういう生活も違ってくるのを見て、みんなやっぱり愚痴る。コーチのせい、誰々のせい、みんな人のせいにする。例えば「あのコーチがいる限り、俺は上に上がれない」とか、「あれに壊された」とか。「いいよ、どうせ今年で終わりだから」とか。時間内の練習も、その後自主練習でも、すぐに帰る準備をしたり、わざとそう見えるようしたり、よどんだ、ふてくれされた雰囲気が2軍の一部にはある。希望に胸を膨らませて入る新人はみな、そういう様子に、違和感を覚える。「ああ、これがファーム擦れ」っていうのか、と思うが、いつか自分もその仲間になっている。一緒になって「ああ、自分はもう終わりだ」とか「もういいよ」とか。最後の方などは「どうせ使ってもらえないんだから」とふてくされていた自分を、すごく後悔している。

【今気づくこと】

総体的に見ると、あそここの場所に居られるっていうのは、どれほど幸せかっていうのを思えば、もうちょっとできたかなと。それで1軍に上がったかという、難しかったかなあとは思いますが、それとは別問題。そのときに全力で打ち込めたかという悔いは、結構今でも残っている。もっと前向きにやれたらろうと。特に自分の(プロに入った)経緯から考えるとそれはある。現役の選手にはもっとよく分かってもらいたいが、これは言ってもなかなか分からない。相対感ってやっぱり後に気づくことなのだと思う。いるときに分からせることができたなら、選手にとってもプラスだし、いろいろな面でプラスだと思う。

<田中> 結果は変わるかわからないかって本当、分からないけれども、それに対する経過をどれだけ充実させるかっていうその「燃焼感」は後になって「絶対あのときの1年間、私やり切ったわよ」と、後に引きずらなくて済む。逆に、引きずるから人間、成長するともいえますが。

【現役選手のとらえかた】

この相対感、(現役選手には)やっぱり通じない。選手にはこれがなかなか通じなく、それどころじゃなくて、とにかくレギュラーになりたいとか、やっぱりその中に埋没する。その世界の中にしか「発想」とか「考え」ってない。僕も選手のときはそうだった。その相対感をどう植え付けるか。いや、植え付けるのが本当に大事なのかどうかって、たぶん本当は大事だと思う。

【そのとき。燃焼と未練】

夏に「小林至、引退」っていう記事が出た。それはなぜかという「本人もだいぶ自信を失っているようだ」というフロントの声で、今年で彼は消えるのではと、見られていたのだと思う。実際には前日に球団から連絡があるところ、すでに新聞記者が先に知っていて、夕方アパートに帰ってきたら新聞記者から「今年で引退だそうですけど」と言われた。その後球団から「小林君、明日、球団事務所に来てくれ」と言われ、あっ、本当なのだ、と。一晩考え、何となく唯一考え付いたのが、アンダースローにするからもう1年やらせてくれと。でも結局だめだった。

現役時代、私は、ポッケにボールとかをいつも入れていた。車の中に握力器とボールとそういうのが置いてあり、日常でボールは握っていた。バツとボールを握って、でも「ああ、でもこれ意味ないな」と思っていたので「結構大事なものを失った」と。辞めるのって今まで自分がやってきたものがパーになる。これはプロだろうがアマチュアだろうが関係ない。それまでほとんど自分をささげてきたようなものがパーになるって、何か非常に消化しづらかった。誰にもスポーツだけじゃなくてこういうことっていうのは、いろいろな局面で来るものなのかなとは思いますが、特に運動やっていた人というのは、ほとんどがあると思う。

☞ 小林至 × 田中ウルヴェ京 × 重野弘三郎

□田中

至さんは、最初のご著書のなかで、「解雇通告をこの本(ボクの落第野球人生)で振り返りたい」と。「でも、自分にとってこれからが本当の人生なのだ」って書いている。これを見てすごく驚きました。これを書いたときって、解雇通告された直後。それなのに自分にとってこれからが本当の人生なのだというシーンが、これは言い訳的に書いたのか、本だからかこよく書いたのか、それとも本心で本当にそう思われて「書けた」のか……。

■小林

その3つのミックスじゃないですかね(笑)。年齢だって25歳かそんなもんですからね。

□田中

そうですね、だからびっくりしたのです。

■小林

そこで何かを成し遂げたわけじゃない。年齢的な若さもあった。それってそんな不自然な感覚じゃないと思うんですね。取りあえずこれからが大事だっていうのって、たぶん誰でも言うと思うんです。それを心からそう言っているとか、何かビジョンがあってそう言っているわけじゃなくて、誰でも同じことを言うと思うんですよ。38歳とかそういった世代の人たちだって、やっぱり人生これからの方が長いつて言うじゃないですか。

△重野

そこは結構選手はありますね。プロってそういう気持ちを出さない人が多いですけど、こうやって気持ちの整理をつけて、1回線を自分で引いていくという。

■小林

やっぱり一生スポーツをやれるわけじゃないですね。

□田中

でもこれからが本当の人生なのだっていうところに、重野さんが今日、自己責任っていうのを何度もキーワードにおっしゃるけれど、すごく「プロアクティブ」に生きていらっしゃるなって、すごく本を読んで感じたんです。なぜかというオリンピック選手の場合、それはジェネラルに言っちゃいけないんですけど、引退をするときに「これからどんな人生が始まるんだろう」って言う人が多い気がします。すごい「リアクティブ」なんです。「これから始まるんだ」じゃなくて「何が始まるんだろう」って、すごく他人任せ、環境任せで、そういう結果は、得てしてトランジションがすごくスムーズじゃないように思います。スムーズじゃないことはいいことなんだけど、でもこの言葉の締め方が私は「ああ、だからこの方はちゃんと決めていらしたんだな」って。

△重野

そうそう、それもあつたんですけど、自己責任っていう言葉を後から付けましたけど、すごい決めているなと思ったんです。節目ごと、状況ごとに。

■小林

僕ね、今、聞かれたから思い出して、あんまりうまく整理されていないですよ。むしろ僕はそういうのを誘ってもらえる人間になりたいと思ったときって、結構あります。要するに自分でだいたい押し売りに行っているんですよ。

□田中

そうそう。

■小林

だいたい無理っばいじゃないですか。県立多摩高校でレギュラーになれない、東大に行く学校でもないんですよ。無理っばいのを頑張るって、結構、みっともないじゃないですか。場の空気を読めないとかね。僕がプロに行くときとか、その前にテストを受けさせてくれるのが決まったときもそうなんです。今思えば滑稽なくらい必死だったんですよ。しかし、周囲は違って、まず自分の親がめっちゃくちゃ反対している。それからもちろんあんまりいいことは言わない人だっているわけですよ。ふざけているとかね。僕ね、大学の監督にこう言われましたもん。それはプロのテストを受けるっていうときじゃなくて、プロ志望って書いたときです。「こういうことを書いちゃいけない」と言われたんです(笑)。その人は社会人をやった人で、やっぱりプロ野球っていうのは高校、大学、それも本当にぎりぎりのところで野球を、ぎりぎりというのは厳しいところで本当に野球をやって、それでもスカウトが見たときに調子が悪かったとか、そういうのでプロに行けない。そういう人たちがごろごろしている社会で、お前のようなアマチュアがプロに行きたいとか、志望なんて書くことは野球に対する冒涇だって言われたんです(笑)。思い起こすといつもそうなんです。周りが認めて、というよりも、自分で一生懸命アピールして。そうじゃなくて、野球に限らず、誘ってもらって、争奪戦とか、小林争奪戦なんて1回ぐらい起こらないもんかななんて。まあ、起こったことないですけどね。

△重野

今日は始まる前からちょっとお話ししていて、小林さんの経歴だけを見ると、やっぱりスーパーに近い、スーパーですよ。それってすごいですねみたいな話をしたときに、いや、やりたいことをやってただけなんですよっておっしゃったんですね。それがものすごい強烈な印象なんですけど。まさにその通りですか。

■小林

そうですね。それも一貫して人生のゴールがここにあってというのでやってきたわけじゃないから、何か運がよかったなと思うんですよ。そのときにそうしたいという短期目標があって、そこだけに一生懸命頑張るのは頑張るんですよ。特に受験勉強のときは本当によく頑張ったと思うんですけど。それから大学野球、そこまでは頑張るんですけど、だけど何かそれに遠大な目標があってというわけじゃないんです。行き当たりばったりですね。

だから結構運がよくてうまくいったときいいんですけど、失敗するときも結構多いんですよ。アメリカのコロンビアの大学院に行って、その後、就職するときなんかまさにそうだと思いますね。目標がないですから、目標のないまま卒業して、何となくどうしようかというので当時、ゴルフに凝っていたからゴルフの会社に入るとか(笑)。でも入った瞬間から後悔したりしてね。

振り返ってみると、あんまり人に偉そうに言えないし、行き当たりばったりで、時々、はまる(笑)。そのはまった時に、縁や運が味方してくれて、思ってもみなかった僥倖に恵まれたというのが本当のところ、はまらないときは、戦略がないから、やっぱり駄目なんです。

△重野

その一つ一つは途中でドロップアウトしているわけじゃないので、やり切った力っていうのがたぶんずっとあると思うんですよ。ちょっと話を戻しますが、プロの前後でご家族にもものすごい反対を受けていますよね。読ませていただいて本の中でロッテを終わった後に家に帰って、その場でも結構お父さんにちゃんとやれみたいなこ

とを言われたっていうシーンが、ちょっとショックだったんですよ。お父さんの一言って出るのかなと思ったんですけど。

■小林

そうそう。僕はプロに入るときもあんなに反対されると思わなかったですね。やっぱり野球をやってきた人間にとっては夢の世界だと思うんですよ。そこに取りあえず入れてもらえるというので、今でもまだちょっと理解できないところがあるんですけどね。それはうちの父なんかは、スポーツに対する蔑視観というのが少しあるんだと思うんですよ。そういうのは確かにあるって言ってましたからね(笑)。

僕は全然むしろそっちの方にもものすごい強いあこがれを持って、今でもそうなんですけど、それから言うと反対するっていうのはよく分からないし、今でも分からないところがあるんですけども。

△重野

何かお父さんに対するその反発みたいなものが、原動力になっているみたいなのはあったんですかね。

■小林

いや、そうでもないですね。それはそんな大それたものでもないですね。

△重野

むしろ自分の決めたことをやり遂げたいっていう思いの方が強かったんですか。行きたいところに行きたい、やりたいことをやり遂げたい。

■小林

そうですね。だけでもプロに入れてくれるといたら、やっぱり入りたいと思うんですよ。

□田中

もちろん入りたいと思うのが自然でもあると思うのですが、でも、けっこうそこでプロに入るかどうかを考える人たちに聞くと、例えばそういう相談もあるんですけど、普通の社員になるべきか、例えば東大と同じような一流大学を卒業することを決めている子には、プロという道よりも、普通の生活を選んだりすることがあります。プロをあきらめるんですよ。

■小林

ええ、そうかな。

□田中

で、そういう若者は、競技は大好きなんです。だけど結局、お父様やお母様のおっしゃる「現実を見なさい」とか、プロなんてたかが1~2年で、大人になったらもおじさん、おばさんになったらどれだけ大したことじゃないかって分かるから、やめなさいってみんなに言われて。でも至さんの場合、お母様だけが至さんをサポートされたじゃないですか。結局そのお母様もお亡くなりになるじゃないですか。そんなようなトランジションだったら、たぶん私、プロになることをやめることも考えるのでは？と思うのです。

なのに、なぜプロに行く、体の自信じゃなくて、人生、ホールライフの自信がどこにあったんだろうかと。私たちは、そういう時、人生の見通しを急にネガティブにしちゃうことがあります。だからその短期の覚悟を決めたくない。先を見ておくと今、ここでプロをやっておくと1~2年のマイナス、そのソーシャルクロック的なマイナスが非常に大きなマイナスになるから、やめようっていう人が多いです。でも私、その気持ち分かるんです。

私、大学4年で選手を辞めたのは、すごくそれがあつたんです。辞めなきゃよかったなっていうのは、後ですごくありますけど、でもなぜそこでわざわざっていうのがとっても私は。プロを辞めさせられたときよりは、プロに入るときのトランジションがすごく興味があつて。

■小林

その迷いはなかったですね。

□田中

すごいと思う。

■小林

今までも迷いないですね。どうでもいいですが、いま、長男は小学校 2 年生ですけど、うちのお父さん、プロ野球選手だったのをほかの友達に自慢していますよ(笑)。ひそかにお父さんはイチローも松井もみんな三振に切って取ったって、うそをついて(笑)。

□田中

じゃあ、先のことは考えなかったですか。

■小林

全然考えなかったですね。だって千載一遇のチャンスで、夢にまで見た世界が扉を開いてくれたんですよ。

□田中

至さん、いつもすごく論理的な技術トレーニング・プログラムとかをおっしゃるのに、自分の人生には論理的とか冷静さがないんですね(笑)。

■小林

(笑)今は結構ありますよ。やっぱり家族がいて、うち子供 3 人いますけど、すごい考えますね。今やっているのは半分サラリーマンに近い仕事をしていますけど、やっぱりそこで家族うんぬんというよりも、何か大人的な判断を……ちょっとあっちにも聞いてみるだとか、この人の話も聞いてみようかとか、自分の独善的になっちゃいけないかなとか今は考えますけど、でもそれを考えるようになったのって、それこそホークスで組織に入ってからですね。たぶんそういうマインドなんでしょうね。だから組織に入って窮屈だなと感じることがままあります。だけど、良く考えてみれば、バランスというか調整ってほとんどの社会で必要で、それが出来ないとなかなか難しい。いままでそうじゃなくて来た方が、むしろちょっと異常だったのかなとかは思いますね。

□田中

それはとてもすてきなと思います。

■小林

全然後悔ないし、今も後悔ないですしね。今も本当に時計の針が戻ったら、もう 1 回同じようにプロ野球に入れてもらいたいですね。

△重野

野球、大好きなんですね。

□田中

そうそう。

△重野

今日、ちょっと早めに来ていただいて、「今日はよろしくお願いします」という話をしたときに、途中で小林さんが「スパイクを買いに行っていますか」って下に行き、5 階にスパイクを買いに行ったんですよ。あれは相当珍しいですよ。

□田中

ここ、下はミズノさんの店舗だけど、そんな人、初めてですよ。水着買いに行く人とかいないですよ(笑)。

■小林

日曜日に今年、初めて草野球をやるんですよ。去年、僕 1 回だけです。それも試合が福岡ですので、履く靴がなくて、気になっていたんですよ。今日ここに来た瞬間にチャンスをみてどこかに買いに行こうって(笑)。安いんですね、5,600 円です(笑)。

□田中

その値段、全然わからないです(笑)。

△重野

昔から全然変わってないってことですね。

□田中

野球の話をするとき、すごく表情が変わるじゃないですか。野球少年みたいに。たぶん息子さん、同じ顔なんだろうなって思うぐらいに(笑)。

■小林

せがれは下手なんですよ(笑)。

△重野

こうやって本当に普通の方では体験できない体験をされてきて、プロ野球の選手だった自分をどう見られているのかなって、結構興味があるんですね。

■小林

ああ、やっぱり誇りですね。

△重野

完全に線を引いてます？

■小林

自分では言わないですけども、やっぱり元プロ野球選手といわれるとうれしいですね。うれしくないですか。元 Jリーガーって。

△重野

いや、うれしいです。

■小林

やっぱりうれしいでしょう。元メダリストっていわれると……

△重野

いや、うれしいという表現って、田中さん、どうですか。

□田中

えっ、うれしいですか。私は……

■小林

うれしいだけでなく、実利もあって、例えば営業になったときなど、役に立つでしょう。

□田中

利用は思いつ切りしています。だけどうれしくなくなっちゃったのが今、動揺しています。だから今、次のトランジションに来ている感じがして、逆に動揺しています。今、うれしいかな、逆にうれしくないでしょう。えっ、プロ野球選手でしたっていわれてうれしいですか。

■小林

うれしいですよ。

□田中

本当に？

■小林

うん。

□田中

「あっ、あのプロ野球選手の小林さんだ」っていわれるとうれしい？ それとも今、テレビで見るプロ野球選手を

見て、自分もそうだったっていうのがうれしい？ どっちですか。

■小林

ああ、それ、うまい質問ですね。どうだろうな。お客さんとかそういう営業とか、そういうときのあれはいいんですよ。そうじゃなくて何かのときに、ああ、あのとき話題になったとかいわれると、何か引退後、何もしていないように思われているんだなあ、なんて考えるときは空虚な感じはしますね。

□田中

そうそう。

■小林

いや、そうじゃなくて一応その後も一生懸命生きていますよって言うと、ああ、あのとき話題になった、あの後どうしたのかと思ったとかいわれてね(笑)。「あの人はいま」的な虚しさかなあ。ずいぶん太ったねっていうのは、よくいわれるんですが(笑)。それはいいんですけどね。そういうときって結構自分には、過去の輝きみたいなしかないのかねっていう感じでね。

□田中

動揺しませんか。

■小林

それはありますね。

□田中

その部分が「元〇〇」の人っていうのは「元」のことに對してどう思うかな。うれしいときも当然あるじゃないですか。

■小林

場合によりますね。

□田中

私もキーワードも決まっているんですよ。すごく胸騒ぎがするキーワードのオリンピックメダリストって言われ方と、全然気にならなくて、ああ、利用しようと思うメダリストっていう言われ方と極端にあるんです。それがちゃんと自分で分けられてからは少し楽になったんですけど、今は両方どっちをいわれても何かうれしくも悲しくもなくなって、今、動揺しているっていう感じで。何かそういうのってありません？

△重野

いや、僕はありますよ。

□田中

両方ですよ。

△重野

うれしさと動揺するときと両方ありますね。

さきほど小林さんが言われた「うれしさ」を聞いて直感的に思ったのは、動揺を感じないくらい、トランジションを繰り返して来られてきたんだなあ、と。

□田中

すごく消化なさったんだなと。

△重野

それは感じましたよ。本当に消化をずいぶん繰り返して、この本を書かれる直後から、去年あたり出された本の間に本当にものすごい出来事があって、アイデンティティーを失った自分に対する葛藤だとかということもたくさん乗り越えられて今、うれしさを感じているのはすごいなと思ったんですよ。それでもうれしさは感じる事ができる。今、いろいろ振り返っていますね(笑)。

■小林

いや、何て答えたらいいかよく分からなかった。

□田中

聞いてなかった(笑)。

■小林

いや、聞いている聞いている。そういう形で振り返ることってあんまりないもんですから。

△重野

そういう意味では今までずっと突っ走ってこられましたか。

■小林

いや、でも脇目も振らずに突っ走るっていうことを、たぶん僕はあんまりしないんですよ。短期間の目標がだいたいいつもあるもんですから。いつもあるというか、そういうの突っ走るっていう状況でもなかった。でも僕、本当に野球を終わった後に大学院に行って、一応大学院に受かるための勉強はまじめにやったんですよ。まじめはまじめだと思っただけですよ。でもまじめにやりましたけど、そのときに目標があったかというとなんか全然ない。

受かるっていう目標はありましたよ。だからそれでやりましたけど、大学院に入った後は、もったいない過ごし方をしたと思います。だって、大学院時代、ゴルフを年間 80 ラウンドしているんですよ。80 ラウンド、しかもニューヨークで。ニューヨークって東京ほどじゃないですけど、マンハッタンですから東京よりもむしろ閉塞感の強い中で。それは渋滞を越えてニュージャージーの方にゴルフへ行く。年間 80 ラウンドしているんです。じゃあ、プロゴルファーになろうかと思ったことも一瞬ありましたけど、それはそんな本気じゃないんですよ。つまり 80 ラウンドといったら、これどれだけ遊んでいたかっていうことなんですよ。だから突っ走ってないですよ(笑)。だって大学院に行ったときは勉強やろうと思えばいくらでもできる環境にあるわけで。そのために高い学費も払っていて。それを、楽勝クラスを見事に探し当てて、すごい授業を取っていましたよ。

ひとつ例をあげると、フューチャー・オブ・メトロポリスっていう、MBA と何の関係があるかっていう科目を探し当てて、履修しました。すごい楽なクラスで毎回、雑談(笑)。

△重野

小林さんってスイッチが入りやすいんですか。スイッチが入ってもものすごい集中しちゃうタイプ。

■小林

あっ、そうそう。たぶんそうだと思います。スイッチが入るか入らないかって結構大きいよね。

△重野

入ったらものすごいぐあーっとやっているから。

■小林

そう。大学院に受かるのはスイッチが入ったんですけど、受かってからは本当にスイッチ切れていましたね(笑)。

□田中

今は入っているんですか。

■小林

今はもうちょっと何か、たぶん大人になったんだと思いますね。半分スイッチ入ったまんま、何となくいろいろなものをこなしております。どうしてもこれ、やりたいっていうのが何かある？ っていわれたら、それはあんた、野球のときに比べれば全然そんなのいないですよっていうのを、15 年ぐらい同じ答えしていました。だから解雇になった後。

□田中

私はだいたい選手っぽいメンタリティーからトランジションで始めたなと思ったときって、電気って選手のときに「バチッ」と本当にオンにするじゃないですか。1 個の電気をぱっとやるだけじゃないですか。でも選手を終わった後の人生って、中途半端な具合の電気をこうやって何か何個もつけておくっていう、これ、トランジションだなんて思ったことがあります。1 個の電気じゃないなって。

■小林

やっているふりとかね。

□田中

そうそう。

■小林

難しいなと思うのは、アスリートというか運動選手にとって、自己表現の場っていうのはそのスポーツなんですね。だから無理して変な言葉でアピールとか、自分はやっていますとか、そういうのって必要ないじゃないですか。ところが、一般社会、特に組織の中に入ると、みんな言葉でアピールするじゃないですか。「これは俺がやった」とかね。不言実行なんてやっていたら、誰もその人の存在に気付かないばかりか、声の大きい人にみんな取られてしまう。いつか分かってくれるということはまずない。一心不乱にそのことに没頭できるスポーツ選手という立場は、社会とはだいぶ違うと思います。同時に、改めて思うのは、その尊さというか幸せさというか。その違いが分かるのがまさにキャリアをどう次に変えていくかという、そこを理解することが一番大事なのかなと。いい、悪いっていうことじゃなくて。

△重野

もう少し聞かせていただきたいんですけど、3 人も今、それを離れて感じていますよね。それを離れてから感じればいいのか、現役の人たちが「こういうことをしたら感じられるんじゃないの」っていうのは、小林さん、考えられたりもしますか。

■小林

分からないですね。分からないですけども、例えばプロ野球だとやっぱりそういうのっていろいろな啓発のプログラムを、本人がやる気がなかったらしょうがないと思うんですね。いろいろな世界があるということを知る手段や環境はないわけではない。相対感覚っていうのって磨けるものなのかな、磨けないものなのかな。

WBC のとき、イチローが日の丸のために、ときりに言っていましたよね。あれ、たぶん彼はアメリカに行く前だったら絶対そんな発想はしなかった。これ、100%、自信ありますよ。僕、向こうに 7 年いて、もう手に取るようにこといったらおかしいですけど、彼、アスリートとしてはそれはもう全然比べものにならないアスリートですけど、ああいう気持ちは手に取るように分かるんです。大塚投手が「この国のため」とか。日本にいる日本人の選手には、そんな意識はぜんぜんなかったそうですよ。僕は直接は携わらなかったですけど、いろいろな関係者からそう聞いています。こういうのって相対感覚なんだと思うのです。つまり、向こうに行くとやっぱり嫌な思いもいい思いもするんですけど、その際の判断基準として、日本という軸が出来るんですよ。そうすると外から見た日本のよさとかね。僕なんかは日本人に生まれたことがどれだけ幸せかっていうのって、アメリカに住んでみて初めて分かった気がします。

アスリートでいられることの幸せも、一般の社会に出て初めて理解できるのではないのでしょうか。思い起こせば、やっているときはそれはきつかったですが、ひとつのことに没頭出来て、仕事時間は短いし、もてるし。

翻って現在。ほとんど仕事していますよ。メールはあるわ、携帯はあるわで、何だかんだでほとんど 1 日仕事しているでしょう。そういう一般社会のことを、現役中に理解していると、もっと頑張れるし、一方で、いつか来る引退する時に備えることもできるかな。そういう相対感覚を、じゃあ、それをどうやって知らせるかっていうのは、プ

口のお2人にお任せしたいところですね(笑)。

△重野

振りましたね(笑)。いつも思うのはたぶん言葉とかで限定できない部分がたくさんあるんですね。小林さんが感じていらしたこととか、田中さんが感じていらしたこととか、皆さんがどう理解するかというのはそれぞれなんですけども、そこを感じていただくということが1つのこの勉強会の狙いでもあるので、ここはあえて「こうでした」っていう形には今日は言わないでおこうと思います。

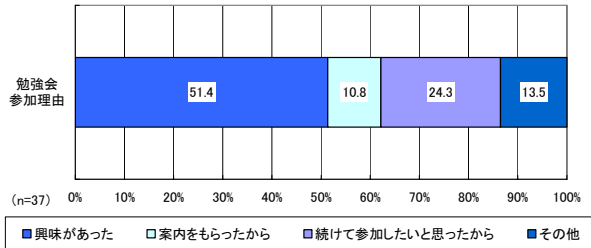
— 小林 至 プロフィール

昭和43年東京都生まれ。平成4年、千葉ロッテマリーンズに入団。史上3人目の東大卒プロ野球選手となる。退団後に渡米。平成8年、コロンビア大学で経営学修士号(MBA)を取得。その後、平成12年までフロリダ州のテレビ局で通訳、翻訳、解説などに従事。平成14年から江戸川大学助教授(18年から教授)、平成17年1月より福岡ソフトバンクホークスに参画。著書に『合併、売却、新規参入。たかが・・・されどプロ野球!』(宝島社)、『アメリカ人はバカなのか』(幻冬舎)など。現在、江戸川大学社会学部 教授(専攻～スポーツビジネス)、福岡ソフトバンクホークス株式会社取締役、福岡ソフトバンクホークス・マーケティング株式会社取締役。1965年東京都出身。1988年早稲田大学教育学部卒、大学時代は名門のラグビー部に所属。

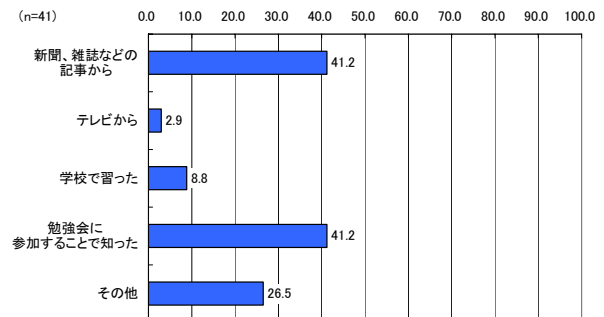
3. 第14回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会 アンケート集計結果

アンケート総数：37

1. 勉強会参加理由



2. 興味、関心について



3. 勉強会はどうだったか。

- 非常に楽しかったというのが一番の感想です
- 以前よりも非常に興味のある方のお話が聞けてとても有意義でした。
- 小林さんのご経験の中で”プロ野球からおさそいがあった時にその喜びで承諾した”その決断が、今の小林さんあるのだと思います。ざっくばらんのお話楽しくうかがいました。
提案・「ファームづれ」の件：二軍選手の「ファームづれ」の件ですが、その中に入ってしまうと最初のころの疑問を忘れ、自分もその環境に入ってしまうというお話の中で、今の立場で二軍選手にアドバイスすることができないと。「花形」で高校、大学から球団に入団したのだから、二軍同士の試合をもっと行い、我々の眼に触れるような企画をどんどんすれば二軍選手も自覚が出てくるのではと思う。簡単な事でも誰もやろうとしないので、是非実現していただきたい。
- 小林さんのトランジションを支えてきた源泉が何であったのかはつかめなかったが、改めて認識したことは多々あり非常に有意義でした
- 初めて参加しましたが今回のゲストが小林さんでよかったとおもいました。とても楽しく聞くことができました。
- 小林至さんの話が軽快でおもしろい。時点時点で何を考えていたかが分かり興味深い内容でした。
- 楽しく拝聴させていただきました。
- とてもキャリアの勉強になりました。
- 小林さんの自己責任の強さがトランジションによく現れており、今までとは違う話で興味深かった
- プロで生活していた方でも、いろんな考え方、感じ方があるのをお三人の会話の中で知ることができた
- よく笑えて楽しかったです。「トランジション」って、人によって本当にとらえ方が異なるのだなとしみじみ思いました
- 小林氏の例から、”ここが転機”とか、”キャリア・トランジションの場面はここ！”といったことがもう少し明らかにされるといいと思いました
- 小林さんが楽しい方だったのでとても楽しくお話をお聞きしました。
- 実体験の基づく話は面白いです。
- 小林さんの楽しいお話をきいただけでなく、とても参考になったことがありました。田中さんや重野さんと異なる感覚の話が出たりしていましたが、あれはあれでよいのでしょうかと思いました。
- ありがとうございました。
- 一体感がありました。ちょっともやもやしています。
- 小林さんのトランジションのときの感情がよく表現されて面白かった。
- 面白かった。でも、勉強会としては物足りない気がする。
- 興味深く聞かせて頂きました。過去の経験を現在に活かす事、活かさない人々との違いを発見できました。ありがとうございました。
- 小林さんの飾らない人柄から、本音が聞けて楽しかったです。
- 面白かった、プロアスリートの視点、考えはフツウの人には分からないから。
- プロを経験した方から transition についてお話を聞けてためになりました
- もっと小林さんの話を聞きたかった。
- 実は大学時代からのファンで特別な想いでした。
- 小林さんのざっくばらんな話が聞けて大変参考になりました。
- おもしろかったです。話もかけあいも。小林至さんの経歴を勉強しとけばよかったと思いました。

- 同世代でもあったので共感できる部分も多く楽しく聞かせていただきました。キャリア・トランジションからは一番遠い位置にある方ではないかなと感じました。ただ短期的なスイッチの入れ方ができれば意外にもキャリアは形成されていくものかもしれませんね。
- キャリア・トランジションに限定したのではなく、スイッチのオンオフ、強い思いいれ等、ヒントになることが多く、とても楽しめました。
- 楽しかった。核心部分はもっと時間をかけても良かったかな。
- 「相対感覚」の話はとてもおもしろかった
- 小林さんを成功の証ととらえるか考えさせられます
- 小林さんの話を直接聞いてよかったです。東大→プロ野球→MBA→ソフトバンク・・・といった輝かしいキャリアの持ち主にもかかわらず、根っからの野球好きといった印象はとても見方が変わるものでした。

4. 日本のセカンドキャリア支援の現状

- 大学の中で一部の体育会でないと本格的に競技ができないという現状があり、世間と離れてしまっている印象を受ける、大学に入る時点でかなり人生の選択肢が限られると自分自身は感じた。
- 私が勤めている会社では、今時ながら企業スポーツに力を入れています。ただ、業績ありきですので、未来としては不透明なものだと思います。
- 現在大学院で勉強しています。仕事を辞めてから、新しく目的を持って大学院に入ったのですが、それこそスポーツ選手ではなく、キャリア・トランジションを感じている自分があります。今日の小林さんのお話で、ご苦労がたくさんあったのにも関わらず、突き進んできたのは”プロ野球に入った事”にプライドを持っていることでその後のキャリア・トランジションの柱になっていると感じました。
- 世間（マスコミということになりますが）が表現している”セカンドキャリア支援”という言葉は、何だか浅薄な印象があり嫌ですね。でも世間に”まず知ってもらおう”事は必要だとも思います。一般のキャリア支援自体5-6年前には認知されていませんでしたから。人材サービス企業にとっては”流行”のようでもありますね。
- 野球選手など、まだまだなのかなと思います。日ごろプロ野球選手と会う機会が多いですが、本当にこれからを考えているのかなと思います。
- だんだんと形になってきた、とり込みがはじまってきた様に思うが、安心してスポーツにとりくめる程の環境ではないと思う
- プロ野球やトップアスリートに対する支援は充実しつつあると思います。高校や大学といった教育機関での取り組みが不十分でしょう。欧米のようなスポーツによるスカラシップを確立させねばと思いました。
- まだまだ整備されていないので、強く必要性を感じている。
- 国からの支援があれば現状ではむずかしい
- 多くの就職支援系企業で扱うようになったが長い目で見ての支援になっているのかは疑問である。
- まだまだスポーツに対する理解が得られていないからか、”体育会系”という部分だけの評価で終わっている気がしてならない
- 「セカンドキャリア」という言葉が取り上げられ始めたころに比べると、少し進んだのかなという気がします。「セカンド」の言葉が外れ始めた、という程度ですが・・・。
- 発展途上であることは間違いないと思うが、スポーツ分野だけでなく、周辺の企業、団体、特に他分野も交えて取り組めれば広がりが出るのでは？
- 世の中の注目をあびていると思います
- Jリーグ以外のプロスポーツはプロ入り後にまったくなされていないのが実情だと思います。選手の契約形態にも問題があると思う
- 恐らく他人事の見方で見ている面が強いのではないだろうか。実際、自分自身も実態を知らないことからこのように想像しました。
- セカンドキャリアをさがすのは、アスリートだけの課題ではないと思います
- セカンドキャリアのサポート教育はもっと若い年代（中、高）からやっていくべきだと思う
- 様々だと思う。うまくいく人、いかない人がはっきりとしていくような気がする。うまくいかない人というのは気持ちの切り換えがうまくできない人ではないだろうか？
- 支援をする側も、される側も最悪だと思います。悲しい現状だと思います。
- スポーツ全体の地位も低いので、セカンドキャリアに関してはまったく遅れていると思います。
- 就職活動の手助けとしかとらえられていないのが残念
- 社会の気運として positive な方向に向かっていると思います
- 支援するしくみや考え方が少しずつ整い始めている気がする
- 明らかに不十分である
- まだまだ未整備であり、今後市場として確立すべきものだと思う
- セカンドキャリアのプロジェクトが発表されて、間口が広がってきていいことだと思います。アスリート自身の意識をどう変えていくかが一番大切だと思います。

- 今日のお話を聞いて強く感じたのは、受け入れる側の意識よりアスリート本人であり、指導者等である現場側の人間がセカンドキャリアについて自己責任で考えることが大切であると思いました。
- 夜明け。これからですね。
- いろいろな企業がアスリートのキャリア支援にのりだしているが、それぞれの現状を知りたいと思っている
- アスリートの能力を生かすためのセカンドキャリアサポートは行われていないのでは？

5. 今後の勉強会にて議論したいこと

- 学生スポーツの指導者の人間教育。
- ある程度の実績を持つ指導者の話が聞きたいです。指導者から見た現役選手の考え方について
- ”キャリア・トランジション”をどういう形で世の方に示しているのか、具体例をお話して下さる機会があればと思います。
- 引き続きアスリート経験者の話が伺いたいです。特にこれから何をしていきたいかを中心に。
- 現役選手の今について聞いてみたい。
- ある程度高い年齢（30才台後半位）まで、スポーツをやった人のトランジション
- 海外事例
- パソナやインテリジェンスではどのような支援をしているのか具体例を聞かせてもらえると嬉しいです
- キャリア・トランジションのサポート方法、技法に関連するものなら何でも
- いろいろな人の話を聞いてみたい（スポーツに限らず、いろいろな分野の方の話）
- 選手の意識を変える事、方々など参考になれば
- トランジションをどのように受け止めどのように対処してきたかをいろんなアスリートの方からお話を伺いたいです。
- アスリートのお話をもっと聞きたい
- プロスポーツからビジネス経営を行っている方など
- 外国人の話とか聞いたらおもしろいかも
- スポーツバカの成功例！
- 元アスリートで、様々な分野で活躍する方のお話を聞かせて頂きたいです。

6. ご意見

- 大学で授業を開講してほしいです。
- 私は大学院で勉強した事をプロ野球関連の仕事に就きたいと思っていますがプロ野球の経験があるわけではないので今トランジションです。ただ目標をあきらめず、小林さんのようにできたらと考えます。”キャリア・トランジション”という言葉を定着させるためにMedia戦略が必要と考えます。多方面のメディアにメッセージ、リリースを送り、もっと取材していただくと良いと考えます。
- 逆に、外部リソースに対して何をリクエストしたいか伺いたいです。
- 大学とか、高校とかでお話してほしい。
- もっともっと光を当てていくことが必要。
- 京さんや重野さんにどんどんメディアに出ていただいてアピールしていただきたいです。
- キャリア・トランジションのABCを講義していくキャラバンなど
- 誰がするかは難しいとは思いますが、アスリートのセカンドキャリア実態についてのドキュメンタリー番組（TV）のようなものを製作して、NHK等で放送してもらおうとかはどうでしょうか
- 選手自身が支援されることについての感謝の気持ちを理解させたいです。
- スポーツ引退後、どのような人生や活躍をされているかをマスコミを通じて紹介するなど
- 地道に継続して話し続ける、話す人はあきるけど、知らない人は大勢いる
- 民間企業により力を出したい！
- 会社や団体や競技の枠を超えて、アスリートのキャリア支援について共通意識をもってスポーツ界全体の地位向上につなげられたらと思います。
- やはりサポートそのものがビジネスとして成り立つことが必要ではないでしょうか？

2006年4月20日 勉強会参加者（敬称略）

飯沼弘統	池田智嘉	石井美恵子	石根左恵	石橋秀幸	岩元宏輔
魚住剛一郎	宇都宮慎二	江口桃子	大浦征也	影井宏秋	久保悠也
後藤聡	小林美由紀	齋藤隆志	坂田純代	佐瀬毅	佐野毅彦
実野善夫	篠原圭子	島 大輔	鈴木慶光	相馬浩隆	高橋伸吾
高橋裕幸	高橋美緒	田島賢哉	谷川 泉	堂田政志	内藤拓也
中村 聡	中村裕樹	中村 実	増田元長	松尾康男	松沢 緑
水谷 初子	村上 祐二	八鍬美由紀	渡邊穂高		

次回勉強会スケジュール

第15回勉強会

2006年6月16日(金)18:30~20:00

ゲスト

広瀬 一郎 氏

スポーツ総合研究所株式会社 所長

江戸川大学社会学部 教授

テーマ

アスリートのキャリア・トランジション時に求められるもの

場所

ミスノエスポーツ

事務局: 有限会社MJコンテス

東京都港区白金台 4-5-7-205

TEL 03-3447-2890 FAX 03-3447-2893

田中ウルヴェ京

清水栄子 / 宮本 純

ご意見・ご質問などございましたら事務局までお問い合わせください。